

「信頼される映像を作り、100年後に資産として残る枠組みを！」

激

しいスピードで進む情報通信技術の発展。
放送・通信の融合の姿はどういったものか。
映像メディア技術の様々な観点から
研究をされている相澤清晴氏に
最先端技術の視点で
放送メディアのあり方について
お話をいただいた。



相澤 清晴

東京大学教授・映像情報メディア学会編集長

プロフィール

1983年東京大学工学部電子工学科卒。1988年同大学院博士課程修了。助手、講師、助教授を経て、現在は東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授として、映像とメディア処理、3次元映像とライフログについて研究を進めている。NHKの永井専務理事が会長を務める「映像情報メディア学会」の学会誌編集長も務めた。

インタビューの目的

放送と通信の融合時代における公共放送の役割について、相澤清晴さんにインタビューをおこないました。相澤さんは、東京大学で教授をされ、映像情報メディア学会で編集長も務められています。情報通信技術の発展が激しいスピードで進むなかで放送メディアはどのように関わるべきか、また何が求められているのかについて、メディア技術の研究をされる立場から話をいただきました。

放送と通信の融合時代の姿

——放送と通信の融合時代といわれていますが、融合の姿はどのように感じておられますか。

放送と通信の融合の時代とはいえ、放送会社と通信会社のそれぞれでの用語でしかないように感じています。わたしは両方の立場から研究していますが、それでも新しい放送と通信の融合の姿について実感が得られていません。YouTubeではインターネット上への動画のアップも進んでおり、機能として融合は既に始まっていると感じています。

また、コンテンツという観点では、フリーの世界で融合が進んでいると感じています。もちろん、IPTV^{*1}やアクトビラ^{**2}のようにオーガナイズされた世界も進んできていて有料課金の世界でコンテンツ市場を作る世界もできていますが、インターネットのビジネスのあり方とちよつと違うと感じています。インターネットの世界はフリーに近い状態でないと広がらない状況があります。iPodがこれだけ普及した理由には安かったということが大きいと思います。

そういう意味では、放送側のコンテンツを握っている立場から見た場合、コンテンツをフリーの世界に切り離すことは考えられないと思いますが、一方で、どうやってインターネットを介して広げていくかということに知恵が必要になってきています。フリーという世界からみれば、料金課金が高いと障壁が高くなってしまいます。フリーから課金までグラデュアルに変化させていく世界を作らなければ、広まらないと思います。

広げる手法の具体例としては、プロモーションという視点で考えても良いと思います。実際、YouTubeでは品質はあまり高くありませんが、ある程度の映像が流せまです。それがプロモーションとなれば、みんなコンテンツを利用していくことになると思います。そうすると低画質を入り口として高画質のハイビジョン映像へ導くなどのことができると思います。入り口の部分は低い料金設定で入りやすくしていくことが必要だと思います。コンテンツを見た人がより高品質な映像を見たいなどと感ずることができ、良い循環ができれば理想だと思います。一度、そういうリンクを作ることができれば、GoogleやYouTubeをNHKの入り口として、それはとても大きな効果が生まれると考えています。

また、以前に講義の中で学生に「デジタル放送を見た人」と「ニコニコ動画」※³を見た人のアンケートを取りました。圧倒的にニコニコ動画が多いという結果になりました。年齢にもよると思いますが、映像に触れる機会が昔と違ってきているのが理由だと思えます。現在では、どのコンテンツが見たいかが重要であって、放送で見るか通信で見るとしてユーザーは意識しないのが放送と通信の融合の姿としてあるのではないのでしょうか。

——見たい番組だけが見られるという状況では、メディアは伝えたいことも伝わらなくなるのでしょうか。

伝えるべき放送が見られなくなるかもしれないという指摘はあると思いますが、わたしはその逆の考えで、これまで視聴率が低かった番組も人の目に触れる機会が増えることで、より多くのニーズをつかめるのではないかと思っています。例えば、深夜しか流れなかった趣味に凝った番組なども、オンデマンドでより多くの人の目に触れる機会が増えるのではないかと思っています。また、検索でヒットすることなどで新たなニーズをつかむこともできるので、チャンスは広がっていくと思います。

ただし、見る側にも評価する目が必要になります。インターネットの情報もエディターシップ※⁴をとおしたものであれば信頼できると思いますが、まちがった情報も多くあります。放送など誰かの管理のもと、きちんと作られたものは評価として格段の違いがあります。今後、この差はさらに明りようになっていくと思います。やはりNHKは下手に人気を売ることなく、信頼されるメディアであるべきだと思います。

NHKに期待する点

——相澤さんがNHKに期待することとは何でしょうか。

わたしは公共放送には映像を先々の資産として残していくことを担って欲しいと思います。例えば、本の場合はある本が国会図書館などに歴史として残っていきませんが、映像で考えると、NHKアーカイブスなど一部でカバーされていますが、民放では公開されていません。長い時間軸で考えれば、著作権が切れた本のように、映像を管理していく枠組みが必要だと思います。NHKが他の民放を含め

※1「IPTV」インターネットプロトコルをもちいたテレビ放送。多くの通信プロバイダーがサービスとして提供している。

※2「アクティビラ」

2006年に設立されたデジタルテレビ向けのポータルサービス事業を展開する企業。映像やサービスを提供している。

※3「ニコニコ動画」P18参照

※4「エディターシップ」編集者の地位や権限

てやるべきだと言うことではないですが、お金儲けとは別として会社組織が変わっても50年、100年経っても映像資産が残っていく枠組みが必要だと思えます。

こうした資産としての考え方とYouTubeのようなビジネスとしての考え方を融合させていくソリューションを考えていくことも必要だと思えます。ヨーロッパでは、放送会社がコンテンツを持ちよって共通のアーカイブセンターを設立し、リユースの仕組みができています。これに相当するようなアクティビティが日本にも必要ではないかと思えます。

——映像技術を研究されている観点からは、NHKが今後果たすべき役割は何だと感じておられますか。

NHKは技術分野において昔のカメラの時代から始まって、ハイビジョンまでこれまで十分に主導的な活躍をされてきていると思えます。NHKの研究所は、規模は大きな研究所に比べれば、中規模かもしれませんが、すごく質の高い研究をやっていると感じています。それは公共放送であるNHKが使うということと、公共に使えるような技術を提供していくという2つのあり方を矛盾せずにお互いに補うような立場で存在できているからだと思います。同じ映像研究でも大学とずいぶん立場は違っていて、技研では現場直結の研究もやっていますし、すごく先を見た研究もあります。NHKのように自分のところで映像制作をする現場があり、綿密に連絡を取りながら研究開発を進めていくことはすごく大事なことだと思います。外から技術をいっばい輸入して出来上がる世界もありますが、でも、それでは一定の組み合わせでしかありません。独自の目的があつて、そして進められる自主的な技術力を持つていな



いと実現できないと考えています。先々の技術革新を作っていく研究を今後もしっかりと進めていって頂きたいと思えます。

——放送局という視点ではどういった役割がNHKに必要だとお考えでしょうか。

NHKは放送局という前提が有り続ける限り、放送コンテンツを自分たちの手で作っていくという技術を発揮していくことが重要だと思います。さまざまな状況に変化があつたとしても、番組作りの機能はNHKに失ってはならないと思えます。NHKは多く番組を自前で作り、活用していくことが将来的に最優先されると思えます。そして、それを取り巻く電波環境なども含めてさまざまな技術研究を進めることも放送局を維持する上で重要だと思えます。

インタビューを聞いて

NHKの放送番組が、映像資産として大きな価値を持つというご意見を頂き、NHKはこれからも高い信頼性と品質を維持した番組を提供することが重要な責務であることを再認識しました。また、放送文化の発展における、NHKの技術的な重要な役割についてもご指摘いただきました。

放送・通信の融合時代においても、これらの役割を、しっかりと果たすために、NHKの基盤の維持についても議論を深めていくべきだと考えます。

報告 技術系列 富山 仁博